高等学校商業科教科書における
保険活動の「働き」に関する
「理解しやすい表現」

Easy-to-Understand Description of “Functions" of
Insurance Activities in Textbooks for Commercial High Schools

2023年9月15日

日本保険学会　関東部会　報告用資料

大蔵　直樹
OKURA Naoki

目　次

序　章　重要な論点の所在および研究の目的　3-6

第Ⅰ章　文献レビューおよび研究材料選定　8-10

第Ⅱ章　変数としての恒常的要素の導出　11-12

第Ⅲ章　真理値表の作成　13

第Ⅳ章　樹形図の plot out　14-15

第Ⅴ章　学習チャネルと理解しやすい表現　16-19

第Ⅵ章　結論と今後の展望　20-27

序章　重要な論点の所在および研究の目的③

1．重要な論点の所在

（1）高等学校商業科の教科書の表現を主題とする議論

① 稲葉(2002)は「高等学校における保険教育の現状を把握するためには，まず教科書の分析が不可欠」と述べながらも，「高等学校の保険関連教材としては，公民，家庭，保健体育，商業の四つが考えられるが，商業は，教科の性質上必ず保険が含まれること，また履修の可能な生徒が商業科に限られることから，今回の分析対象から除外した」とも述べる。

確かに，稲葉(2002)は「教科書の分析が不可欠」と述べている。しかし，商業科教科書の表現（特に保険活動の「働き」）に関する検討は行っていない。

② 家森(2015)は，高等学校教科書の「現代社会」「政治・経済」について調査し，私的「保険」についてはほとんど言及されていない，と小括している。「家庭科」の教科書７種類について，その表現について併記比較を行い，「高等学校『家庭科』の教科書では，『保険』について一定の説明が行われている。教科書によって記述量にばらつきが見られる。比較的取り扱っている教科書でも，用語の簡単な定義の提示にとどまっており，生活において保険を賢く使う知識が身につくような記載や分量となっていない」との小括を行っている。

確かに，家森(2015)は，商業科に関して学習指導要領に「『保険』についての言及があった」とし，さらに，学習指導要領解説に「保険活動の働きと仕組みについて理解させる」という「企業の保険利用を意識した内容」の言及があると述べている。しかし，商業科教科書の表現に関する調査検討は行っていない。

商業科教科書の表現（特に保険活動の「働き」）を主題とする議論（その評価も含めた検討）を行っている先行研究は見当たらない状況といえる。

（2）教科の教育目的と高等学校教科書における表現との関係

① 家庭科および公民科の教育目的 ・・・ 消費者教育（堀江ら，2021）

「消費者教育」という目的から，教科書の表現に関する研究ではなく，生徒個人の消費者リテラシー教育（保険の場合は保険リテラシー教育）に焦点を当てた研究が求められるようになっている。

② 商業科の教育目的 ・・・ ビジネス活動教育（小見山，2010）

ビジネス活動に保険はなくてはならないものであることから，商業科の教科書に関して，保険活動の「働き」に関する表現について検証を行うことは重要なことである。

③ 商業科の教育目的に沿う教科書の表現

確かに，商業の概念は「時代の推移によって変化し，時代の進展に伴って変貌するもの」（庭田，1961）であり，商業科教科書の内容についても「時代に合わせて変えていくことが重要」（雲英，1995）である。しかし，商業教育の意義について「経済社会の持続的な発展を担う職業人」の育成（文部科学省，2019，p.19）という点に関しては，時代の変遷に左右されない恒常的要素が存在している。

④ 時代の変遷に左右されない保険活動の「働き」に関する恒常的要素の検証

以上から，一連の商業科の教科書記載内容を通時的に照合しながら，経済社会の発展に貢献し人々の生活のためになる人材育成という普遍の教育目的との関係で，保険活動の「働き」の構成要素に関して「時代の変遷に左右されない恒常的要素とは何か」という論点を議論する，ことは重要なことである。

（3）商業科教科書における「理解しやすい表現」について

①　勝呂（1956）と青島他（2021）の表現の比較

戦後の新学制改編後に採用された高等学校商業科の教科書：勝呂（1956）の表現

「保険のしくみを利用することによって，事業も家庭も予測できない危険を克服して，経済的な安定が得られるから，事業は積極的に活動できそこに働く人々も業務に専念できて経済活動は発展することになる。」

高等学校商業科の直近の教科書：青島他（2021）の表現

「保険会社は，損害に備えるための保険を提供し，ビジネスを行ううえでの金銭的な損失の負担を減らすことで，ビジネスをサポートしています。」

②　単なる比較だけでは判断できない

比較だけでは，どちらが「理解しやすく，役に立つ説明文となっているか」の判断はできない。

保険は

- 「保険はどうも難しい・・・」（中出，2012，p.3）
- 「触知できないもの」（Illich，1989，邦訳，p.4）
- 「保険と聞くと，とにかく『わからない』というイメージがある」（小池他，2005，p.4）

（4）重要な論点の所在

一連の商業科の教科書の表現を通時的に照合し，商業科の教育目的に沿い，商業科の高校生にとっての「理解しやすい表現か否か」という議論すべき論点が所在する。

2. 研究の方法

（1） 通時的照合による研究対象教科書の絞り込み

新学制改編後に採用された商業科教科書（65種類）の保険活動の「働き」の表現に関する通時的照合を行う。65種類のうち同一著者（代表者）および同一出版社の教科書については，表現がほぼ同一であることを確認の上，比較考察の対象から外す。なお，参考までに1944年文部省発行の教科書も対象に加え，最終的に表現の比較考察の対象教科書の絞り込みを行う。

第Ⅰ章

援用手法：通時的という手法

Saussure（2016, 邦訳）の手法を援用。

第Ⅱ章

援用手法：共時的という手法

（2）共時的照合により，保険活動の「働き」の恒常的要素の導出

絞り込みを行った商業科教科書を研究材料とし，保険活動の「働き」に関する表現から，共時的照合により恒常的要素の導出を行う。

Garfinkel の手法（浜，2017）を援用。

第Ⅴ章

援用手法：翻訳定理

（3）真理値表の作成，樹形図のplot out，そして学習チャネルへ変換

恒常的要素を変数とし，通時的絞り込みを行った商業科教科書の保険活動の「働き」に関する表現より真理値表を作成し，統計ソフト（RStudio）により樹形図を plot out する。理解しやすい表現へと変換する基準を作成し，翻訳定理を援用し樹形図を学習チャネルに翻訳変換（｛樹形図｝→（学習チャネル））し，理解しやすい表現へのステップとする。

援用手法：真理値表

援用手法：樹形図

Illich（1970）の手法を援用。

援用手法：学習チャネル

3． 研究の目的

（1） 研究の対象

高等学校商業科の教科書における保険活動の「働き」に関する表現を研究の対象とする。

（2） 研究の目的

高等学校商業科の教科書における保険活動の「働き」に関する理解しやすい表現に練り上げることが本研究の目的である。

（3） 研究の問い

商業科の教科書における保険活動の「働き」に関する現在の表現は，高校生にとって理解しやすいものとなっているであろうか。そして，高校生が将来，ビジネスに携わるようになる際，保険がビジネス活動に重要な役割を果たすとの理解促進，並びに，さらに理解を深めたいとの主体的な学習意欲にも繋がる，最適なものとなっているであろうか。

第Ⅰ章　文献レビューおよび研究材料選定

1．商業学の文献および商業科教科書の検証

「教科の性質上必ず保険が含まれる」（稲葉，2002）とされる。はたして，文献サーベー（下記２．）を通じて，（１）商業学の曙の頃から，また，（２）戦後の商業科教育開始の頃から，そしてまた（３）商業学の文献一般に保険が含まれているか否か，含まれているなら，商業学一般の文献は保険をどのように取り扱っているか（下記３．（１）および（２）），さらに，商業科の教科書は保険活動の「働き」についてどのように表現しているか（下記４．），について検証する。

2．文献サーベー

（１）商業学の曙：ベルギーモデル

明治20年にベルギーのアントワープ高等商業学校に留学した飯田はその著書（1902）に「保険は一つの商業行為にして商業科の一科として論ぜらるるなり」と記している。

（２）戦後商業科教育の開始当時の状況

小見山(2010)は「戦後，新制高等学校発足当初の商業科の昭和23年度の教育課程で，商業の最も基礎的・基本的な知識（売買・金融・運輸，保管，保険等）を授ける必修課目として『商業経済』が設けられた」と述べている。

（３）商業学の文献一般

坂口(2005)は「商業学は，経済にとっての保険の意味および保険取引の経営に関する問題に関わることによって，保険を商人的観点から取り扱っている。」と述べている。

深見(1959)は，商業の運送機能，商業の補完機能，商業の金融機能とならび，「商品の流通にはいろいろな危険が伴う。・・・・これらの危険を負担する働きを，商業の保険機能という」と述べている。

商業学の曙の頃から現代にいたるまで，商業学の性質上保険が含まれるということは，必然的に結び付く結論（corollary）と言えよう。辞書にも商業学について「原理や法則などを研究する学問。物品が生産されてから消費者にわたるまでの運送・保険・倉庫・保管などについて研究するもの」（『日本国語大辞典　第10巻』p.490）とされている。

3. 商業学の文献は保険をどのように取り扱っているか

（1）明治13(1880)年創立の岡山商法講習所の教科書

岡山商法講習所にて教科書用に翻訳した山本他(1881)は「保険トハ何ゾヤ保険トハ他人ヨリ幾多ノ報酬ヲ請取リ其人若シ災難ヲ蒙ムルトキハ之を償ウベシトノ請負ヲナスヲ謂ウ也」と，保険活動の「働き」に関して表現している。

（2）取引企業説の立場の文献における保険活動の「働き」の表現

福田(1965)は，商業をもって「取引企業」と解する立場から，保険活動の「働き」につき「保険事故が起こった後においても，保険事故が起こらなかったと同じ状態を保たせることにある」と述べている。

（1）および（2）のとおり，商業学における最近のメインストリームとされる取引企業説の立場の文献まで，保険活動の「働き」について述べている。

4．商業科の教科書は保険活動の「働き」をどのように表現しているか

商業科の教科書に，保険活動の「働き」がどのように表現しているか，について検証を行うため，戦後の新学制改編にて採用されたものから最近のものまで，通時的に教科書（65種類）にあたり，そのうち同一著者（代表）かつ同一出版社の教科書については，表現がほぼ同一であることを確認の上，対象から外し，研究材料を22種類の教科書に絞り込んだ。なお，参考までに1944年文部省発行の教科書も対象に加えた。

5．研究の材料

保険活動の「働き」に関する表現が現れる高等学校商業科の教科書（22種類）を，通時的照合により，研究の材料として選定する。

図表１．　研究材料とする高等学校商業科の教科書

項番	著者	発行年	出版社
1	TAC	2022	TAC
2	青島矢一	2021	実教出版
3	小松章	2021	東京法令出版
4	片岡寛	2016	実教出版
5	山田研治	2013	暁出版
6	花輪俊哉	1999	一橋出版
10	田島義博	1993	大原出版
11	片岡一郎	1988	実教出版
12	原田俊夫	1988	一橋出版
13	江田三喜男	1982	実教出版
14	柳川昇	1979	一橋出版
15	深見義一	1979	実教出版
16	上林正矩	1973	実教出版
17	糸魚川祐三郎	1968	実教出版
18	藤本幸太郎	1967	一橋出版
19	向井鹿松	1962	一橋出版
20	勝呂弘	1958	実教出版
21	山口茂	1957	清水書院
22	文部省	1944	文部省

（筆者作成）

第Ⅱ章　変数としての恒常的要素の導出

1．検証の方法

（1）恒常的要素の導出

①　高等学校商業科教科書（22種類）を研究材料とし，各教科書の表現から保険活動の「働き」について，時代の進展にもかかわらず恒常的に存在する要素を，共時的照合により導出する。

②　導出した恒常的要素を変数とし，各教科書の表現について，ブール代数（“記載あり”(True)=1 / “記載なし”(False)=0）により真理値表（Truth Tables）を作成する。

③　作成した真理値表を検証用データとし，統計ソフト（RStudio）により変数間の距離を測定し，樹形図の plot out を行う。

④　plot out された樹形図につき，保険活動の「働き」に関する理解しやすい表現への練り上げにむけ，翻訳定理（浜，2017）を援用し学習チャネルへと翻訳変換する。

恒常的要素として各教科書の表現より導出した下記(a) –(h)を変数とする。

(a)　予測できないリスクにさらされている

(b)　損害やリスクに備える

(c)　損害が発生，経済生活上の支障

(d)　埋め合わせ，補償，保障，損害てん補

(e)　助け合い，相互扶助，確率，大数の法則等

(f)　安心してビジネス活動ができる

(g)　保険に加入する

(h)　そのための保険を提供する

第Ⅲ章　真理値表の作成

1．真理値表の作成

導出した恒常的要素を変数とし，一連の教科書（22種類）から，ブール代数（田村，2015）分析手法により真理値表を作成する。

図表２．　真理値表

教科書 ＼ 変数		(a)	(b)	(c)	(d)	(e)	(f)	(g)	(h)
(1) TAC	2022	1	1	1	1	1	0	0	0
(2) 青島	2021	1	1	1	1	1	1	0	1
(3) 小松	2021	0	0	1	1	1	1	0	0
(4) 片岡	2016	0	0	1	1	0	1	1	0
(5) 山田	2013	1	0	1	1	1	1	1	0
(6) 花輪	1999	1	0	1	1	1	1	1	0
(10) 田島	1993	1	0	1	1	0	1	1	0
(11) 片岡	1988	1	1	1	1	1	1	1	0
(12) 原田	1988	0	0	1	1	0	1	0	0
(13) 江田	1982	1	1	1	1	1	1	1	0
(14) 柳川	1979	1	1	1	1	0	0	0	0
(15) 深見	1979	1	0	0	1	1	1	1	0
(16) 上林	1973	1	0	0	1	1	0	0	0
(17) 糸魚川	1968	0	0	1	0	1	0	0	0
(18) 藤本	1967	0	0	0	1	1	0	0	0
(19) 向井	1962	1	1	1	1	1	0	0	0
(20) 勝呂	1958	1	0	1	1	1	1	1	0
(21) 山口	1957	1	1	1	1	1	0	0	0
(22) 文部省	1944	0	0	1	1	0	0	1	0

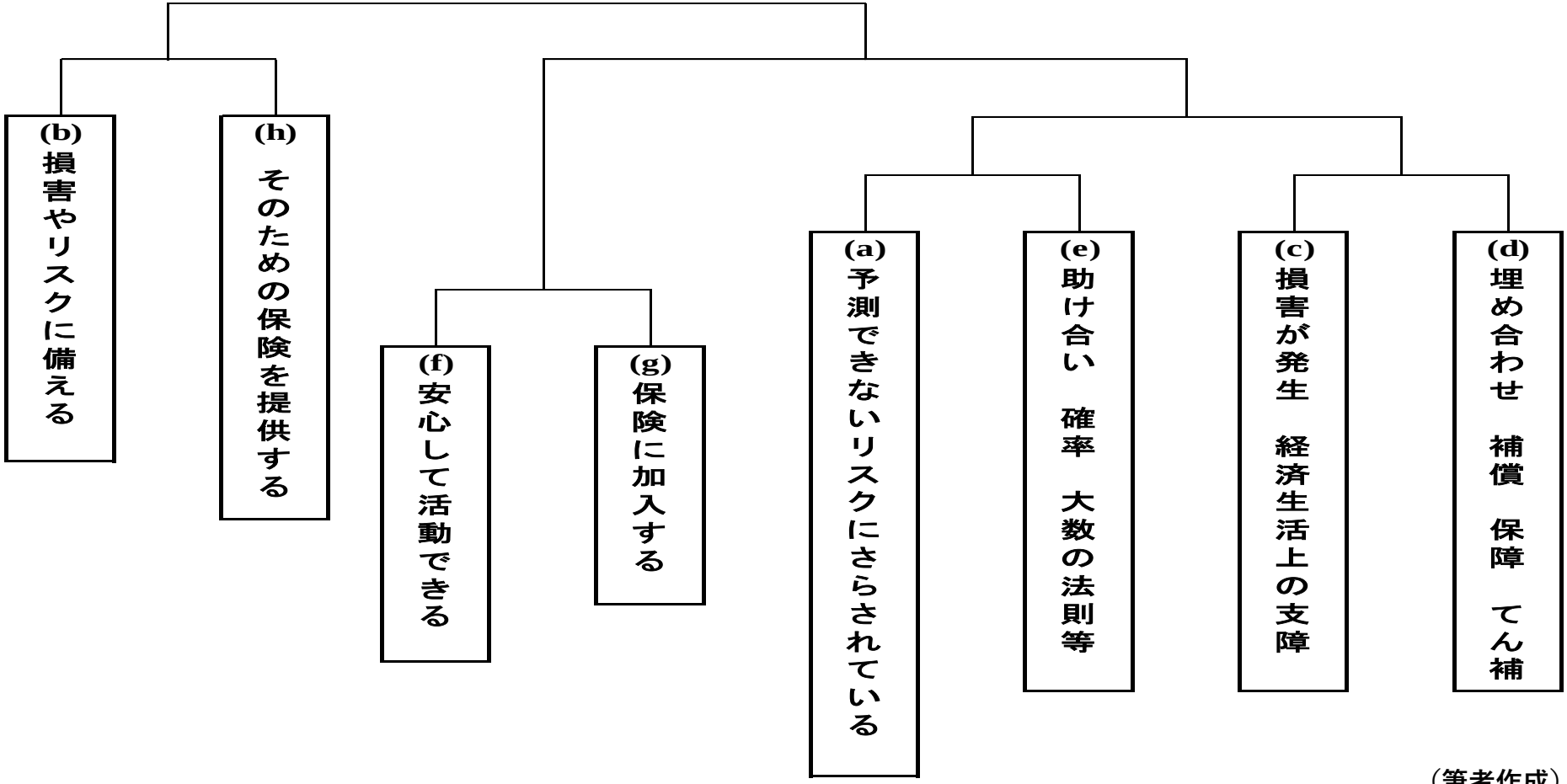
（筆者作成）

第Ⅳ章　樹形図の plot out

1．樹形図の plot out

統計ソフト（Rstudio）にて真理値表を分析し樹形図を plot out する。

図表３．　樹形図



（筆者作成）

2．樹形図の解釈

plot out された樹形図について，以下のとおり解釈する。

① 確かに，「(a)予測できないリスクにさらされている」から「(e)助け合い」等が必要となり，plot out された樹形図においては，「(a)」と「(e)」は近くに位置するようになっている。しかし，保険知識に不慣れな商業科高校生にとって理解しやすいかどうかは別問題である。

② 確かに，「(g)保険に加入する」から「(f)安心して活動できる」ことになり，plot out された樹形図においては，「(g)」と「(f)」は近くに位置するようになっている。しかし，「(g)保険に加入する」ことを保険活動の「働き」として表現している教科書はほとんどない実態にある。「(g)保険に加入する」を保険活動の「働き」に関する「理解しやすい表現」に含めることによって，高校生にとっての理解促進につながると解釈する。

③ 保険活動の「働き」を主題に考察分析してきたが，商業科の高校生，すなわち将来保険を利用するようになる側を主体として見たとき，保険活動の「働き」としてだけではなく，保険活動の「働き」（c，d）と保険の「効用」（f）に分化して捉えることができる。そこで，樹形図を学習チャネルへと翻訳変換し，商業科の高校生にとって理解しやすい表現へと練り上げる際には，保険活動の「働き」および保険の「効用」に分けて捉えるようにする。（p.23　図表５．　参照）

第Ⅴ章　学習チャネルと理解しやすい表現

1．樹形図を学習チャネルへと翻訳変換（理解しやすく）する基準の設定

（1）　長々とした説明を避ける

萩原（2020)は「『解り易く』書くということは，くどくどと説明するということではない」と述べる。保険知識に不慣れな商業科高校生にとって理解しやすい表現にするため「できるだけ説明を省略」（萩原，2020)する。

（2）　学術上の専門用語や保険技術に関わる説明を避ける

「理解しやすい文章とし て書く要諦は・・・・，難解な用語やいいまわしを可能なかぎり」（鷲巣，2022）避けることであるとされる。また，「助け合いの精神は，保険の運用には必要な条件ではない」（田村，1990)とされ，保険（危険）団体や大数の法則等は「保険の計算技術上の特徴を意味するに過ぎない」（笠原，1978)と捉えられている。そこで商業科高校生に対して，保険の専門用語や技術的側面の概念に踏み込んだ説明については避けることとする。

（3）　現代の高校生のパーソナリティ（友枝，2009）を踏まえた表現とする

高校生の意識調査の計量分析を通じて，友枝（2009）はBeck の「個人化の進行」（Beck，1998，邦訳）） を引用し，「個人化が進み感情をコントロールする方法が高度になっている」と小括している。その調査結果から，商業科教科書における保険活動の「働き」の表現に十分な理論的根拠なく“相互扶助”が入ることに唐突感を持つ商業科高校生も多いと考え，，高校生のパーソナリティを踏まえた表現とする。

（4）　商業科の高校生の未来にとって「役に立つ」（『エミール』）表現にする

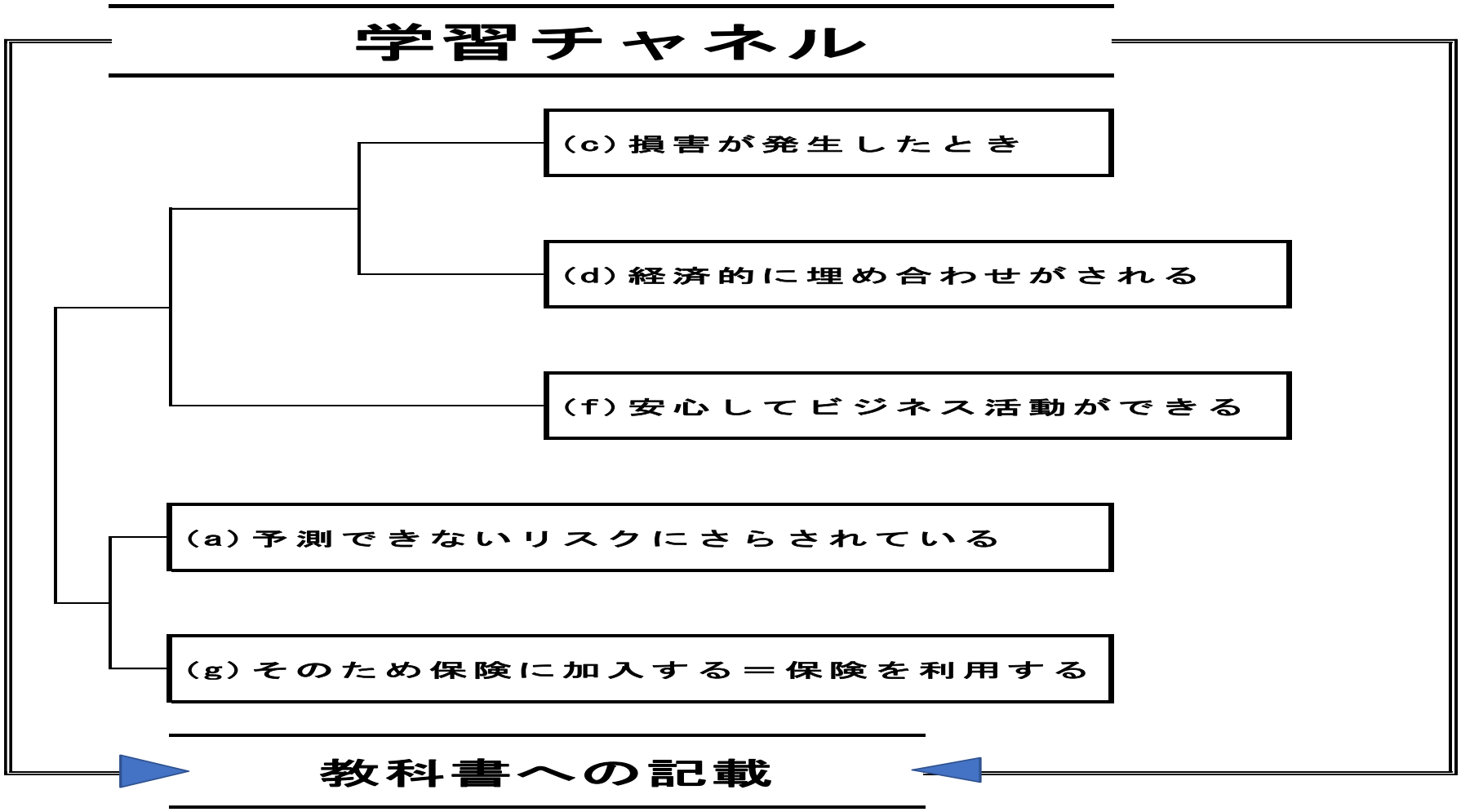
Rousseau は教育学の古典的文献たる著書『エミール』の中で，「生徒の理解力のおよばない社会関係について・・・・遠ざけること」（ Rousseau，1965，邦訳，p.197)と述べ，生徒を指導していく上で「『役に立つ』という言葉の観念を与えること」（ Rousseau，1965，邦訳，p.183)は大きな手がかりとなると述べている。

2．学習チャネルへの翻訳変換（｛樹形図｝→（学習チャネル））

翻訳定理の公式。
｛xxx｝は，翻訳の対象，(yyy)は，翻訳の結果を示す。

（1）　樹形図の内容を基準に照らし，学習チャネルへと翻訳変換する

図表４．　学習チャネル



（筆者作成）

（2）翻訳変換された学習チャネルをもとに，理解しやすい表現へと練り上げる

本研究の問いは「商業科の教科書における保険活動の『働き』に関する現在の表現が，高校生にとって理解しやすいものとなっているであろうか。そして，高校生が将来，ビジネスに携わるようになる際，保険がビジネス活動に重要な役割を果たすとの理解促進，並びに，さらに理解を深めたいとの主体的な学習意欲にも繋がる，最適なものとなっているであろうか」というものであった。

そうした問いに対する本研究における考察を踏まえ，以下の通り表現を練り上げる。

学習チャネルの各要素を，次の流れにて理解しやすい表現へと練り上げる。

(a) ⇒ (g) ⇒ (c) ⇒ (d) ⇒ (f)

理解しやすい表現

ビジネス活動を行う企業は様々なリスクを負担することになります。企業として保険に加入することにより，自らが抱えるリスクを保険会社に移し替え，万が一の事故により経済的損失が発生する場合に対する備えとなり，安心してビジネス活動を継続することができます。

第Ⅵ章　結論と今後の展望

1．論点に関わる考察の結果

（1）通時的照合の結果

高等学校商業科教科書の保険活動の「働き」を主題として議論するため，戦後の新学制改編以降に採用された教科書（65種類）につき通時的照合による選別を行い，22種類の教科書を研究材料とする絞り込みを行った。

（2）共時的照合の結果

22種類に絞り込んだ高等学校商業科教科書の保険活動の「働き」に関する表現から，恒常的要素の導出を行った。

（3）学習チャネルへの翻訳変換（｛樹形図｝→‘学習チャネル）の結果

① 導出した恒常的要素を変数とし，22種類の教科書の表現について，ブール代数に基づく真理値表を作成した。

② 真理値表をもとに統計ソフト（RStudio）により，樹形図を plot out した。

③ 理解しやすい表現へと練り上げるための基準を作成した。

④ 保険活動の「働き」を樹形図段階に至り保険の活動の「働きおよび効用」に分化発展させ，さらに学習チャネル段階に至り保険活動の「働きおよび効果」との評価解釈に発展させた。

⑤ 樹形図を学習チャネルに翻訳変換し，理解しやすい表現へと練り上げを行った。

2．プロセス（樹形図⇒学習チャネル⇒理解しやすい表現）の結果

（1）プロセスにより得られた理解しやすい表現と教科書の表現との比較

①　得られた表現

ビジネス活動を行う企業は様々なリスクを負担することになります。企業として保険に加入することにより，自らが抱えるリスクを保険会社に移し替え，万が一の事故により経済的損失が発生する場合に対する備えとなり，安心してビジネス活動を継続することができます。

①に欠けている表現

- 「損害やリスクに備える」（要素(b)）の欠落

vs

②　直近の教科書の表現

「保険会社は，損害に備えるための保険を提供し，ビジネスを行ううえでの金銭的な損失の負担を減らすことで，ビジネスをサポートしています。」（青島他，2021）

②に欠けている表現

- 「予測できないリスクにさらされている」（要素（a））の欠落
- 「保険への加入」（要素（g））の欠落

②の評価できる点

- 「保険技術面」（要素(e)）に触れていないこと

（2）比較の結果が示唆していること

比較の結果は，本研究におけるプロセスにより得られた「理解しやすい表現」が完全なものではなく，現在の高等学校商業科の教科書の表現について，改善すべき余地があることを示唆している。改善の余地という点から，今後の教科書研究の更なる進展が期待される。

3． 本研究の限界と今後の課題

（1）本研究の限界

① 本研究が練り上げた「理解しやすい表現」について，保険知識に不慣れな商業科の高校生にとって「理解しやすいか否か」について実証的検証ができていない。

② 本研究の問いの後段部分「高校生が将来，・・・・，最適なものとなっているであろうか」について実証的検証ができていない。

（2）限界克服のための今後の課題

① 実際に商業科高校生に対する授業を実地し，彼等の反応の確認を行い，より理解しやすい表現の練り上げにつなげる。

② 質的研究において活用されている半構造化インタビューを採用し，本研究における考察により獲得した「理解しやすい表現」についての商業科高校生の受け止め方を可能な限り自然に引き出す。

「半構造化インタビュー」とは，面接調査法の一種であるが「大まかな方向性を決めたインタビューガイドに従って質問が行われ，対話の流れに合わせて質問を変化させることができ，柔軟にその意見を聞き取ることが可能となる」とされる。

4．今後の展望　（次ページ　図表5.参照）

（1） 高等学校商業科の教科書研究への貢献（盛り込むべき記述について）

本研究においては，保険活動の「働き」に関する理解しやすい表現にフォーカスし，樹形図から学習チャネルに翻訳変換させる際に，相互扶助の理念についても保険に関する技術的な要素に含め表現から削除した。しかし相互扶助の理念について，商業科の高校生が理解し身に付けることは，彼等の将来にとって重要なことであると考える。従って，保険活動の「働き」以外の何らかの領域において相互扶助の理念を教科書に盛り込むべきと考える。その観点からの教科書研究の発展への貢献が期待される。

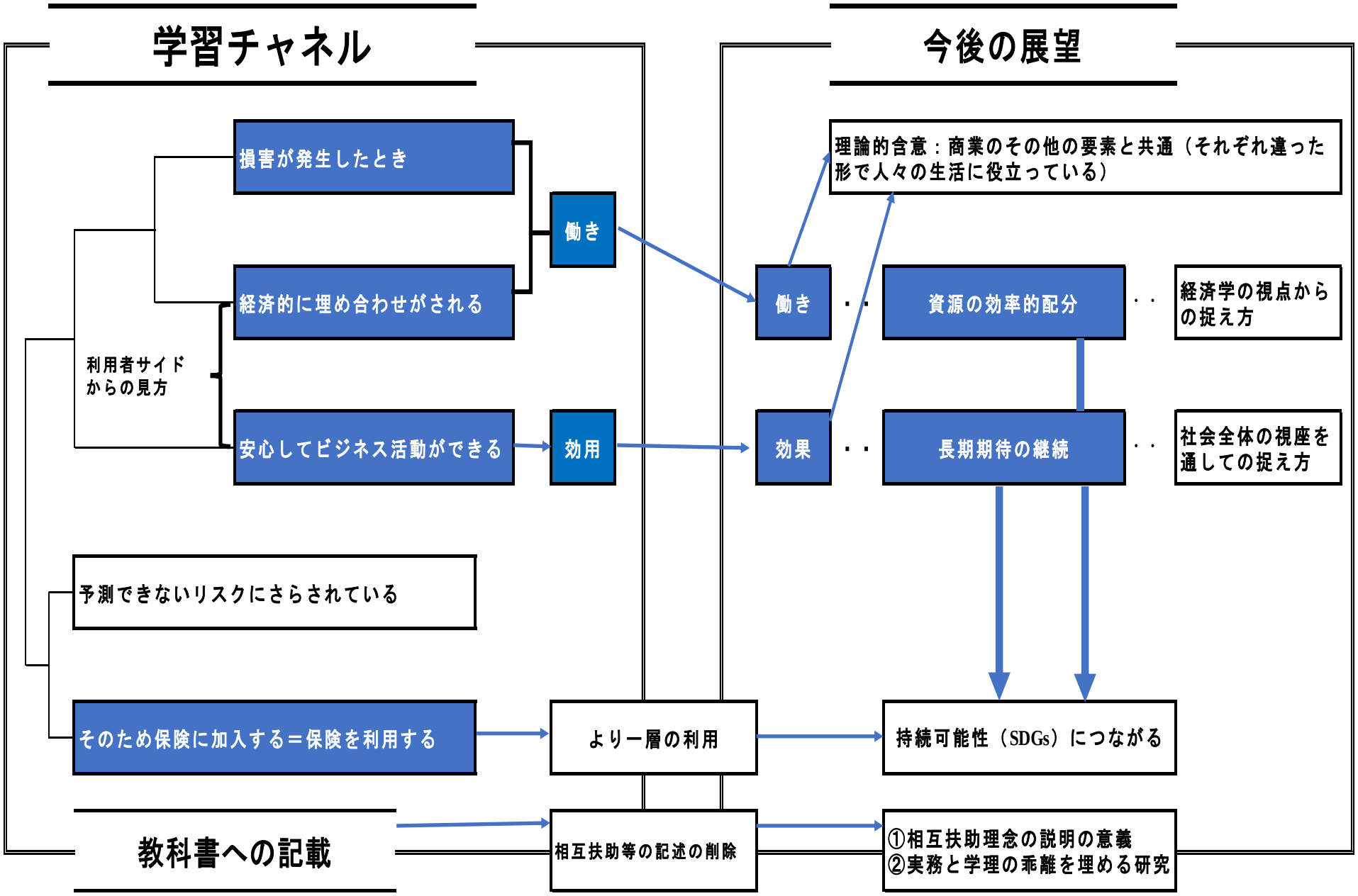
（2）商業学の研究への貢献（理論的含意）

本研究においては，樹形図および学習チャネルの中でも，「保険への加入」という要素を重視した。「保険加入」という要素の重視は，保険のより一層の活用につながり，ひいては持続可能な社会課題（SDGs)につながることになるといえる。さらにまた商業を構成する要素である金融，運輸，倉庫等の活用についても同様の整理が可能との理論的含意を獲得した。商業の各要素のより一層の活用は，社会全体の持続可能性につながると捉えることが可能となる。その観点からの商業と持続可能な社会課題（SDGs)という，商業学における研究の発展への貢献が期待される。

（3）保険学の研究への貢献（実務と学理の乖離の解消）

相互扶助の理念に関し「保険業界が肯定し，日本保険学会では肯定色が薄い」（田中，2021）と，実務と学理の乖離が論点として所在する。その乖離に関して学問的根拠を整理し実務と学理の乖離の解消を試みることは，実学たる保険学の研究の発展への貢献が期待される。

図表5.　理解しやすい表現へのプロセスの結果



（筆者作成）

参考文献

邦文文献

青島矢一，他8名（2021）『ビジネス基礎』実教出版。

飯田旗郎（1902）『商業汎論』東京博文館。

稲葉浩幸（2002）「高等学校における保険教育の現状と課題」『保険学雑誌』577。

Illich, I.（1977）『脱学校の社会』東洋，小澤周三訳，東京創元社（*Deschooling Society*，1970）。

Illich, I.（1989）『政治的転換』滝本往人訳，日本エディタースクール出版部（*Political Inversion*，1972）。

宇沢弘文（2000）『ヴェブレン』岩波書店。

笠原長寿（1978）「近代保険と『助け合い制度』とのかかわり」『現代保険学の諸問題：相馬勝夫博士古希祝賀記念論文集』。

Keynes J. M. (1941)『雇傭・利子および貨幣の一般理論』塩野谷九十九訳，東洋経済新報社（“*The Geberal Theory of Employment, Invterest and Money*,” Macmillan & Co.,Ltd: London, 1936)。

小池栄子，萩原博子（2005）『小池栄子と萩原博子のいちばんやさしい保険のはなし』日本経済新聞社。

小見山隆行(2010)「日本商業教育史からみた連続性・非連続性の考察：徳性の涵養を中心に」『商学研究』50(2・3), 25-52。

雲英道夫（1995）『 新講商学総論 』多賀出版。

坂口光男(2005)「保険法学説史の研究」『明治大学社会科学研究所紀要』44(1), 2655-304。

勝呂弘（1956）「保険」深見義一『商業一般』実教出版。

Saussure, F. （2016）『新訳ソシュール一般言語学講義』町田健訳，研究社（*Cours de linguistique générale*，1916)。

田中隆（2021）「生命保険における『助け合い』と相互性に関する考察」『保険学雑誌』652，193-214，DOI:10.5609/jsis.652_193

田村正紀（2015）『経営事例の質的比較分析：スモールデータで因果を探る』白桃書房。

田村祐一郎（1990）『「社会と保険」：社会・文化比較の鏡としての保険』千倉書房。

友枝敏雄（2009）『現代の高校生は何を考えているか：意識調査の計量分析を通して』世界思想社。

中出哲（2012）「第1章　現代社会における保険の役割」大谷孝一編『保険論[第3版]』成文堂。

庭田範秋（1961）「商業学における保険理論」園乾治編『現代保険学の課題』東洋経済新報社。

日本大辞典刊行会編（1974）『日本国語大辞典　第10巻』小学館。

萩原朔太郎（2020）「僕の文章道」吉行淳之介選『文章読本』中央公論新社。

浜日出夫（2017）「エスノメソドロジー」友枝敏雄，浜日出夫，山田真茂留編『社会学の力：最重要概念・命題集』有斐閣。

深見義一（1959）『商業一般』実教出版。

福田敬太朗（1965）『商業総論』千倉書房。

Beck, U. （1998）『危険社会：新しい近代への道』東兼，伊藤美登里訳，法政大学出版局（*Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt/Main, 1986)。

堀江雅子，大藪千穂，泉谷徹（2021）「継続的金融経済教育の授業効果：高校家庭科教員との協力実践」『生活経済学研究』54、15-28。

文部科学省（2019）『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　商業編』 p. 19。

森常治（1971）『通時批評から共時批評へ』思潮社。

家森信義（2015）「わが国の中学校および高等学校における保険l教育の現状について」『生命保険論集』191，87-125。

Rousseau, J. J. （1965）『エミール』永杉喜輔，宮本文好，押村襄訳，玉川大学出版部（*émile ou de l’éducation*，1762)。

鷲巣力（2022）『書く力：加藤周一の名文に学ぶ』集英社。

参考文献

海外文献

Illich, Ivan.(1970). *Deschooling Society*, Harper & Row, Publishers, New York, N.Y.

Manes, Alfred.(1922). *Allgemeine Versicherungslehre*, Verlag und Druck von B.G. Teubner, Leipzig, Berlin.

教科書

青島矢一，他8名（2021）『ビジネス基礎』実教出版。

糸魚川祐三郎，他6名（1968）『新商業一般　三訂版』実教出版。

上林正矩，他7名（1973）『現代商業一般』実教出版。

江田三喜男，他4名（1982）『商業経済I：企業と消費者の調和を求めて』実教出版。

片岡一郎，他1名（1988）『明解商業経済I　改訂版』一橋出版。

片岡寛，他16名（2016）『ビジネス基礎』実教出版。

木村増三（1993）『図説商業経済I　新訂版』大原出版。

久保村隆祐，他8名（1997）『流通経済』実教出版。

小松章，他8名(2021)『ビジネス基礎』東京法令出版。

雲英道夫，他2名（1999）『流通経済　新訂版』一橋出版。

勝呂弘（1958）「6. 保険」深見義一編『商業一般』実教出版。

TAC（2022）『ビジネス基礎』TAC。

田島義博，他4名（1993）『新・商業経済Ⅰ　新訂版』大原出版。

花輪俊哉，他9名（1999）『現代流通経済』一橋出版。

原田俊夫，他1名（1988）『商業経済I　三訂版』一橋出版。

深見義一，他8名（1979）『図例商業一般I』実教出版。

藤本幸太郎（1967）『最新商業一般I』一橋出版。

向井鹿松，他5名（1962）『標準商業一般I』一橋出版。

文部省（1944）『高等科商業：上』文部省。

柳川昇，他1名（1979）『商業一般　改訂版I』一橋出版。

山口茂，他3名（2013）『商業一般』清水書院。

山田研治，他2名（2013）『新ビジネス基礎』暁出版。

ご清聴ありがとうございました